

奈良・山田寺跡



(吉野山)

- 1 所在地 奈良県桜井市山田
- 2 調査期間 第八次調査 一九九〇年(平2)八月~一二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥・奈良・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

山田寺跡では、一九七六年以来七次に及ぶ調査が実施され、伽藍の配置や塔・金堂・講堂・中門・回廊の規模・構造などが明らかとなつた。今回の調査は、山

田寺の寺域の西限と回廊東北隅部の状況を確認するため、西区と東区の二つの調査区を設けて行なつた。

調査面積は計八〇〇m²。

S B 六八五を確認し、また東区では、東回廊 S C ○六〇、回廊東雨落溝 S D 五五一、東回廊の東に位置する宝藏 S B 六六〇、宝藏の四周をめぐる雨落溝 S D 六六一~六六四、寺域の東限を画する掘立柱南北塀 S A 五〇〇、基壇状高まり S X 五三五などを検出した。木簡は、東区の S B 六六〇基壇上面から一点、その西雨落溝 S D 六六四から七点、計八点が出土した。S B 六六〇は方三間の総柱礎石建物で、基壇上面からは木簡のほかに若干の木製品・金属製品が出土した。S D 六六四は幅一~一・五m、深さ〇・二mの素掘りの溝で護岸施設はみられない。堆積土は上下二層に分れ、木簡は上層から大量の木製品・建築部材、少数の金属製品とともに出土した。

8 木簡の釈文・内容

宝藏 S B 六六〇基壇上面

(1) 「日向寺□□一斗一升半□□

〔緩カ〕

同月白□九斤之中八斤者昔日出分

・「□□□□ (221) × 45 × 9 019

(2) × 経第廿一帙 十卷

(40) × 26 × 2 019

(1)は表裏が判然としないが、かりに「日向寺」で始まる側を表とすると、冒頭の「日向寺」は寺名と考えることができる。日向寺という名称の寺院は、奈良県橿原市南浦町に現存し、浄土宗に属する。

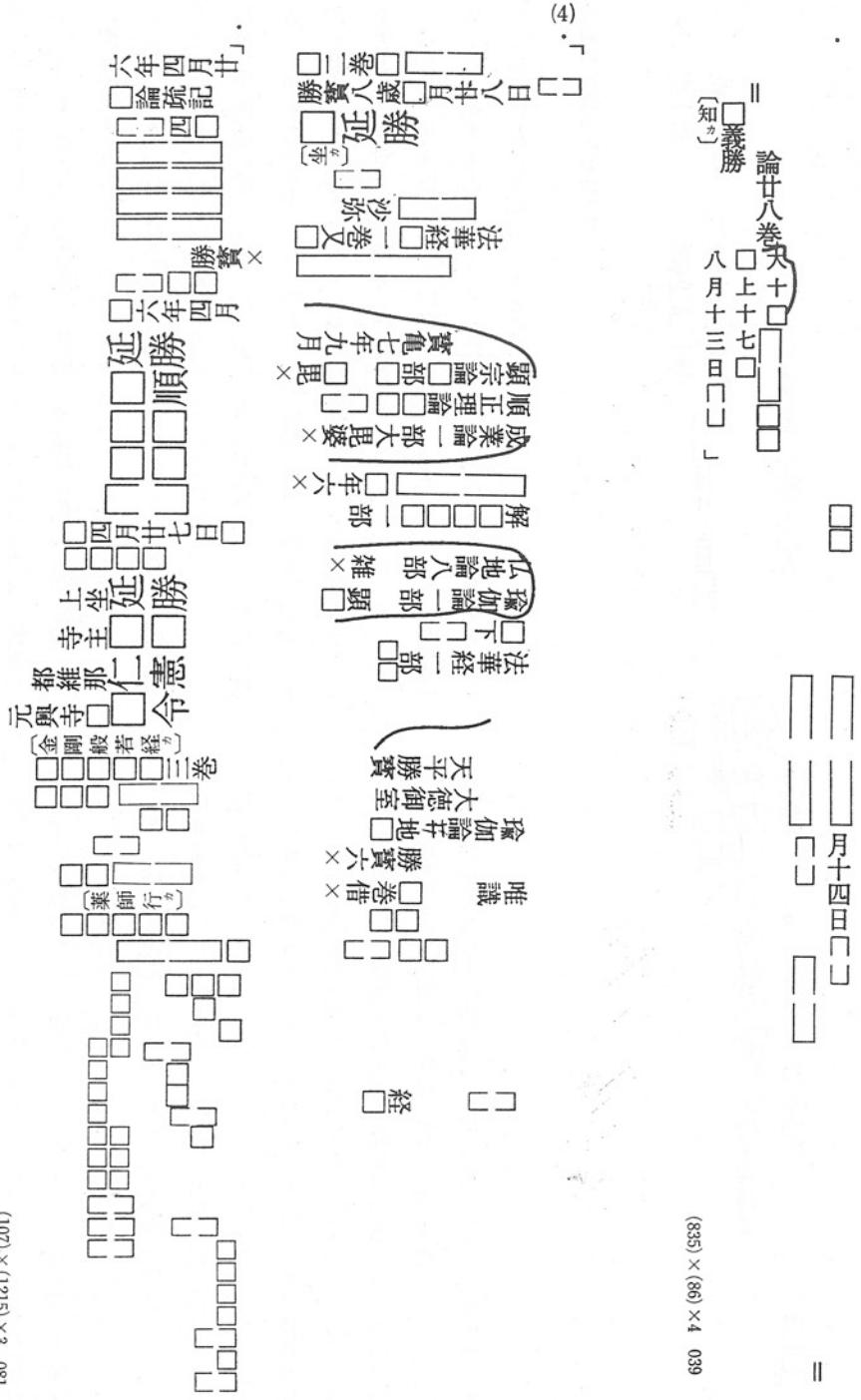
日向寺の付近からは古瓦が採集され、その瓦によって同地には白鳳期頃の寺院が存在していたと考えられている。この寺院は、延喜七年（九一七）成立の『聖徳太子伝暦』や室町時代の『聖誓抄』などに聖徳太子建立の寺院の一つとして見える「日向寺」に比定されているが、日向寺 자체は全く古代の史料に現れない。従って(1)は日向寺に関する唯一の古代の史料と見ることができる。

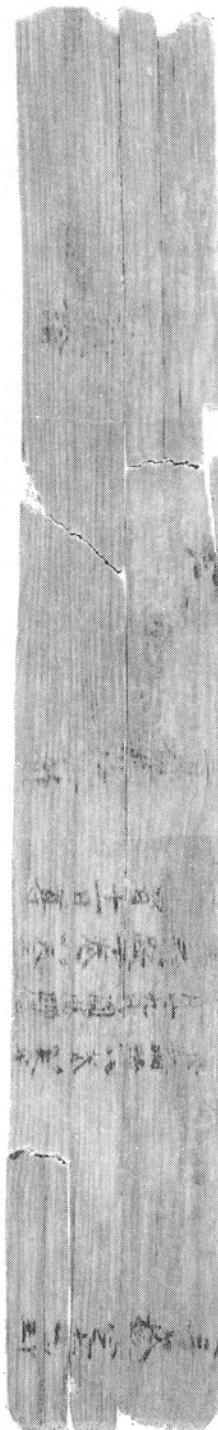
しかし、腐蝕が進んでいるが、裏にも墨痕が認められ、また「日向寺」で始まる面を表とした場合、第二行冒頭の「同月」が受ける文言が現状では初行に見あたらない点が疑問で、あるいは裏とした面を表として文章が「日向寺」に続き、ここは「(何)日、寺に向かう」と読める可能性が全くないわけではない。このように「日向寺」で始まる面が表であるのか、さらには「日向寺」が寺院名を書いたものであるのかは問題の残るところである。

宝蔵西雨落溝SD六六四

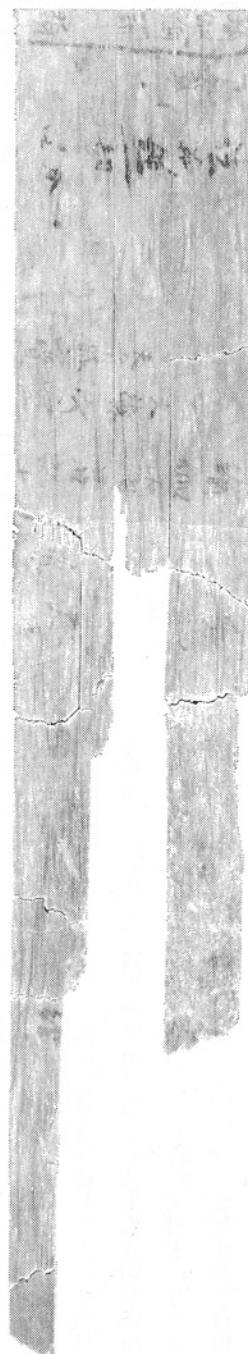
(3) × 疏一部	判比	一卷	〔量カ〕
弘仁二年十一月十六日充義勝	〔下カ〕	□□月廿七日□□□□	入□□□□□□□
× 巻借慈忠 知倉人乙人	目代光敏	□□□□□□	□□□□□□□
大同二年十一月廿六日下唯識論疏十四卷削沫師之	受義勝	□□□□□□	□□□□□□□
知倉人持成	□□論□□	〔一カ〕	□□□□□□

(2)は経巻を束ね包む帙に付けられていた題籤（経籤）である。正倉院には奈良時代の経帙が残存しており、中には現に経帙牌（題籤）を付けたものもみられる。それらには帙の通し番号や経帙に含まれ一括された経典の名称、あるいはその巻数などが書かれ、これら經典を一括して包んだ経帙は、櫃や厨子などに整理されて納められ、保管されていた。(2)の表には経典の名称と経帙の通し番号および巻数が書かれている。経典名を書いた部分が欠損しているが、かりにこの経帙が雑経を集めたものでなく、ただ一種の経典を納めたもので、しかも全ての帙が一〇巻を単位としていたと仮定すると、ここに書かれていた経典名は大般若經以外に考えられない。それは、日本に舶載された漢訳の一切經において、少なくとも一二〇巻を有する単独の經典は大般若經六〇〇巻以外に存在しないからである。

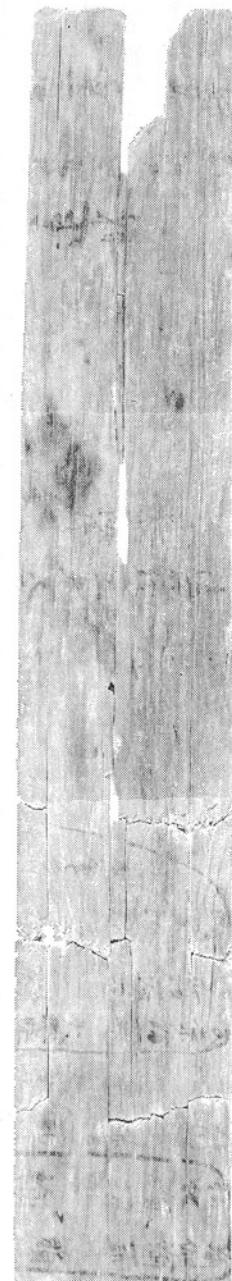




(5)表



(4)表



(4)と(5)は所謂横材の木簡（木目に直交して文字を書く）で、いずれも貸出中の経典を検定した結果を記した木簡かと思われる。ともに經典を検定した内容を記したのち、検定の年月日を書き、その下あるいは次行以降に山田寺の上座・寺主・都維那たちが自署を加えてい る。このことは經典の検定に寺の三綱があたっていたことを示す。

(4)の表には検定結果を記した部分とは逆方向に文字を書き、經典の貸出について記録した部分が所々にあり、その中には見せ消ちによる抹消が行なわれている箇所もある。文字を削り取った跡や削り残した文字も見られ、またそこに記された年紀にも天平勝宝六年（七五四）と宝亀七年（七五六）の開きがある。従って本木簡の表は長期にわたって表面を削りつつ使用されつづけたものと推定される。なお(4)(5)によって山田寺三綱の存在とその具体的な僧名が初めて知られた点は留意される。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』

一〇（一九九一年）

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』一一（一九九一年）

山岸常人「山田寺宝蔵と大般若經帙題籠」（日本建築学会大会学術講演梗概集（東北））一九九一年

橋本義則「山田寺跡出土の木簡」（考古学ジャーナル）三三九 一九

（橋本義則）

木 簡 研 究 第 一 号

卷頭言

木 簡 研 究 第 一 号

狩野 久

一九八八年出土の木簡

概要	平城京跡	平城京左京二条二坊十一・十四坪坪境小路跡
原宮跡	藤原京跡	長岡宮・京跡
跡大覺寺御所跡)	大坂城跡	長岡京跡
丸遺跡	姫路城跡	嵯峨院跡
手遺跡	（武家屋敷跡）	吉田南遺跡
村B遺跡	姫路城跡	小犬
中江田本郷遺跡	（東部中濠）	玉
野田遺跡	山の神遺跡	玉
野田遺跡	池ヶ谷遺跡	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	今小路西遺跡	居
糸屋町遺跡	（福祉センター用地）	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	中里遺跡	居
糸屋町遺跡	高溝遺跡	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	狐塚遺跡	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	仙台城二の丸跡	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	熊	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	一乗谷朝倉氏遺跡	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	三小牛ハバ遺跡	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	能登国分寺	瀬名遺跡
糸屋町遺跡	尾道遺跡（G D 01 地点）	瀬名遺跡

一九七七年以前出土の木簡（二二）

出雲国序跡

中国出土簡牘的保護研究

中国出土木・竹簡の保存科学的研究（抄訳）

胡 繼 高
訳・佐川正敏

木箱と文書

所謂『長屋王家木簡』の再検討

有韻尾字による固有名詞の表記

彙報

頒価 三八〇〇円

四〇〇円